

村松・林研究室

[窓Ⅱ - 時空間からの環境との対話] ホモ・フェネストラートル (マドを作るひと)

建築・都市史、都市遺産・資産開発学

建築学専攻

<http://www.shinlab.iis.u-tokyo.ac.jp>

1. マドを作るひと (ホモ・フェネストラートル)

ホモ・サピエンス (賢いひと) とは、リンネが「自然の体系」(1758)で提唱した人間に対する種名であり、人間を他の種属とは異なる点を「賢い」という点に込めた結果である。以来、ホモ・ファーベル (作るひと) (ベルクソン,1907)、ホモ・ルーベンス (遊ぶひと) (ホイジンガ,1938) と、それぞれの時代の人間観を反映しつつ人間の本質をひとつの言葉に集約して、代わる代わる命名がなされた。

マドは、人間と環境との相互作用を、物理的に、あるいは非物理的に制御する装置である定義すると、実は、マドを作るという行為こそが、現代の人間の在り方を象徴しているのではないかと私たちは考えている。そこで、ラテン語の窓を意味する「fenestra」に作るひとという語尾「ator」を付け、「homo fenestrator」(ホモ・フェネストラートル/マドを作るひと)を、この時代の人間の本質を示す種名として提示したい(図1)。



図1 ホモ・フェネストラートル

2. マドの進化系統学(Window Phylogeny)

しかし、マドは、常にひとつであったわけではない。分化し、進化してきた(図2)。マドが発明された時点で、ひとは初めてひととなった(マドの誕生前後)。そして、そののち、気候、生態、地勢などによる地域生態圏に影響されつつ、マドは変異をくりかえしていった(地域生態圏社会のマド(図3))。やがて、ひとは地域生態の持つさまざまな制約を乗り越え、マドによって、エネルギー、時間、空間、欲望、環境を制御し、均質で快適な生活を求めていった(成長社会のマド)。しかし、人間の数が増大し、欲望が無限に拡大することによって、地球という有限体のもつ環境収容力をはるかに超えてしまっている。この時必要なのは、定常型社会とそれを実現する定常型社会のマドなのである(定常型社会のマド)。これを突き詰める学問が、マドの進化系統学(Window Phylogeny)である。



マド地域生態圏

図3 マドの地域生態圏



図2 マドの進化系統樹

3. 本プロジェクトの主旨

本プロジェクトは、本生産技術研究所、人間・社会系部門に属する村松研究室、林憲吾研究室が共同で実施しているものであり、ここ数年の成果を提示する。私たちは、都市、建築、社会基盤施設などを包含する建造環境(built environment)を、人類の発生以前まで、また、地球全体にまで跳躍し、観察・分析・比較することによって、現代社会、未来に示唆を述べるという研究手法を採用している。

マドというのは一見、些細な対象にしか見えないかもしれない。しかし、この些細な事象の中に、人類の今後に資する多様な知恵が詰まっている。過去という異なる時間や地球の異なる空間は、その私たちのゴールに多大な知恵を与えてくれる壮大な宝庫なのである。そして、マドの進化系統学が行き着く先は、まったく新たなマドを作り出すことにある。